

Eureka XI

六年制通信 No.23 令和5年10月27日(金)号

Are you a student?

研修旅行で一年ぶりに松下村塾を訪れました。吹けば飛ぶような小屋、言ってしまえばそれまでの、小さな陋屋ですが、あの狭い空間で維新の志士たちが勉強していたのかと思うと、なんだかんだと下らん理由をつけては勉強をさぼる現代人が情けなくなりますね。今回は長年の疑問、あの、押したら壊れそうな建物は本当に台風で吹き飛ばされないのか、何か対策をしているのか、資料館で聞いてきました。答え：何もしていません。雨戸は閉めています、でした。ホンマかいな。信じられませんでした。

今回の旅行では中三生の成長を見ることができ、嬉しく思いました。一人の遅刻で全員の行動が遅延するような事態もなかったですね。先生方が何か大きな声で注意をしている風景も見ませんでしたし。私の見る限り、皆とても楽しそうにしていました。

(そう言えば、先日文化会館で行った中学行事の時にも同じ感想を持ちました) また、松陰神社で(口の端にタレつけて、あはは) 団子を食べている姿を見ました。そんなに美味しいですかと聞きたくなるような満面の笑顔でした。いつかどこか違う場所で名物の団子を見かけたら松陰だんごと味比べができますね。君たちはガイドさんの説明にも、当たり前なのですが、熱心に耳を傾けていました。余談ですが、今回のガイドさん(私はB組のガイドさんしか知りませんが)、これまで何人もガイドさんの説明を聴いてきた私から見て非常に優秀な方でした。あの人はきっと会社で新人研修を任されているでしょうね。私ならそうします。それほど優秀でした。君たち、ラッキーでしたね。

成長している、と言われても成長している本人にはわからないでしょうね。そんなものです。今できていることは昔からできているように思うかもしれませんが、少し考えればそんなわけないのは理解できますよね。ゆっくりと時間をかけて成長しているのですから、気がつけばできるようになっていた、それが実感だと思います。六年制に入学して三年弱、少なくとも二年以上はこの学び舎でたくさんのことを学んできたはず。一年生や二年生に理解できないことでも三年生ならできる、そういう実感が教員側になれば研修旅行の引率など怖くてできませんよ。そう考えると、いつも言うように、一年生や二年生のうちに自分にも他人にもレッテルを貼ってはいけません。私たち教師も戒めなければいけないことです。君たちは若く、まだまだ成長します。体も心も成長します。小学生の、そう例えば四年生の頃を思い出してごらん。その頃にも君たちには悩みはあったはず。友だちとの関係、先生との関係、親のこと、勉強のこと、いろんな悩みがあったでしょう。でも、その頃の自分に今の自分なら言ってもらえることがいっぱいあるのではないですか。それが成長というものです。

さて、松下村塾を訪れるといつも **student** という語が浮かんできます。学校では「学生」と訳していますが、君たち「生徒」のことを **student** と言っても、特にアメリカなら問題ないでしょう。君たちも **Are you a student?** と問われれば、**Yes, I am.** と答えますよね。しかし、**student** の、そして動詞形の **study** の本来の意味を知れば、あの松下村塾の、八畳の狭い空間でひしめき合って議論をしていた若者たち、彼らこそ **student** と呼ぶにふさわしいということがわかります。語源的には **study** も **student** も、どちらもラテン語の **studium** (ストゥディウム) という名詞に遡ります。意味は「熱意、熱中」です。ラテン語の辞書には **studeo** 「熱心に求める、切望する、志す」とその現在分詞形 **studens** 「情熱を傾けている…」などが見られます。ちなみに **-ens** は現在分詞の語尾ですから現代英語なら **-ing** に当たるわけですが、**-ent** や **-ant** という語尾で現代英語に入っています。この語尾の意味は「～する人」という意味です。要するに **student** は「**study** する人」という意味なわけ。本来の意味を考えれば **student** とは「何かに熱中している人、情熱を傾けている人」を指すわけです。維新の頃の若者には明らかに過剰な言動が見られますが、彼らは間違いなく「情熱を傾け、熱中している人」、すなわち **student** ですよ。では、もう一度。 **Are you a student?**

今週のおすすめ

・瀬尾まいこ 『そして、バトンは渡された』 (文春文庫)

今の優子の名は森宮優子、少し前は泉ヶ原優子、その前は水戸優子。水戸さんは本当の父親。生みの母は亡くなっていて、水戸さんが梨花さんと再婚したので新しい母親が梨花さん。この女性、かなり自由奔放。水戸さんが仕事の都合でブラジルに赴任することになり、それを機に日本に残ると言い張る梨花さんと離婚。優子はどちらを選ぶか迫られるが、結局友達と別れたくないという理由で日本に残る。その後梨花さんと二人の生活が続くが、まもなく梨花さんは泉ヶ原さんと再婚。富豪の泉ヶ原さんの家には大きなピアノもあり、お手伝いさんもいて、それまで二人でしてきた家事も何もしなくてよくなり、しかしそれがやがて気づまりになってきた梨花さんがほぼ家出状態となる。優子は泉ヶ原さんと二人で暮らしていたが、ほどなく梨花さんが泉ヶ原さんと離婚して森宮さんと再婚。森宮さんと梨花さんと三人で暮らすことになる。高校生の優子に三十代後半の父親。梨花さんと森宮さんは同級生だった。しかし、ここでも梨花さんは森宮さんと優子を捨てて家を出る。本書は、この森宮さんとの二人暮らしの生活から始まる。森宮さんは愛すべき変人として描かれている。いきなり高校生の娘ができて、しかも母親に出て行かれ、それでも父親であろうとし、娘を精一杯の愛そうとするのだが、そのちょっとずれ方が面白い。

それにしても、この梨花という女はどういう根性をしているのか。森宮さんを捨てて最後には、一度は捨てた泉ヶ原さんと再婚しているんですけど。全くその無軌道ぶりには呆れますが、しかしこれには訳があつて…。誰に共感を覚えるか、人によって違う、そんな小説のように思います。私は観ていないけど映画もあるそうですね。

BGMは 映画 La La Land の *Another Day of Sun* でした…。